

第8回高知大学看護学会 シンポジウム

在宅生活が思い描ける看護に取り組む - 教員の立場から -

小笠原木綿

高知大学教育研究部医療学系看護学部門 助教

在宅看護の基本、在宅ケアの基礎を身につけるための教科として、1997(平成9)年より看護基礎教育の中に在宅看護論が加わりました。イメージ的には新しくも思えますが、我が国の在宅看護活動の起源は古く、1世紀以上も前に遡り、明治時代に看護教育が開始されたことによって始まったと考えられています。その時代から、すでに現在の訪問看護師の活動と似た派出看護婦(師)の活動の存在がありました。当時、家庭に出向き必要な看護サービスを提供することや患者・家族と契約を結んで看護が提供されており看護婦(師)が自由契約のもとにサービス提供を行ったという点から、現在の訪問看護ステーションの源流とも考えられる活動がありました。

こういった活動からも見えますが、在宅看護は明治から大正にかけては生活の場に出向いた看護から始まりました。昭和30年代に入ると病院が整備され、高度経済成長及び高齢化社会の到来により病院での看護へと推移しました。その後、時代がめぐり近年はふたたび地域で療養生活を送る人々に視点が置かれ、住み慣れた生活の場に出向く看護のニーズが、クローズアップされているというのが大きな時代の流れです。

現在、私は、高知大学医学部看護学科で「在宅看護学」に関わり始めて5年が経ちます。それまでの数十年は看護師としていろんな経験をしました。そのひとつに訪問看護ステーションでの勤務経験があります。当時勤務していた訪問看護ステーションでは、現在と同じように9月頃から半年間、高知大学の看護

学生さんを在宅看護学実習として受け入れをしていました。

その時の私は、学生さんが目を輝かせて実習に来てくれる事がとても嬉しく、とにかく在宅に興味を持ってほしい“楽しい”を体で感じてほしいと学生さんの事だけを考えていたように思います。しかし、現在は、学生さんを実習先へ送り出す側となると、実習先の事も気になるようになりました。学生さんに対して在宅看護学実習に興味を持ってほしいという思いに加え、実習先の指導者さんとの関わりの大切さ、訪問させていただく家庭へのマナー、療養者・家族のそれぞれ歩んできた歴史等、一人ひとりの人生そのものに関わらせていただくことになるため、人としての社会性も大切にして実習に臨んでほしいと願い教壇に立っています。

今回の学会テーマであります、「その人らしさを支える看護一病・障がいとともに生きる人によりそう」すなわち、私が伝えたい事、それは、療養者・家族が家族関係・社会関係のなかで、どういう生活をしているのか、どこに心の支えがあるのか、という視点を持って関わっていくことが大切だということです。また、生活する上で疾患や障がいを持って生活が困難となった時でも、自分自身の考えに沿って社会資源を選択・調整しながら、元気であった時と同じような暮らしに少しでも近づけられるように支援することが大切だと思っています。

そのためには、4年間という大学生活において、学問は勿論、自分自身の感性を磨いて

周囲に気遣いのできる人になってほしいと思います。いろんな事に対して「体験する」「感動する」「想像する」「表現する」そして、「さりげなくする」の5つの事を大切にしてほしいと願います。人は、いつもの生活「当たり前な生活」が続くということが幸せです。目の前の相手の気持ちを考える事が、今回のテーマのよりそう看護の入り口なのではない

かと考えます。

最後に、今後、ますます地域に目をむけた継目のない多職種連携を深める事が課題だと感じます。専門職からの働きかけと同時に、それを受ける地域住民の自立自助を促す支援が図れたら、地域全体が元気となりレベルアップにつながるのではないかと密かに願っております。